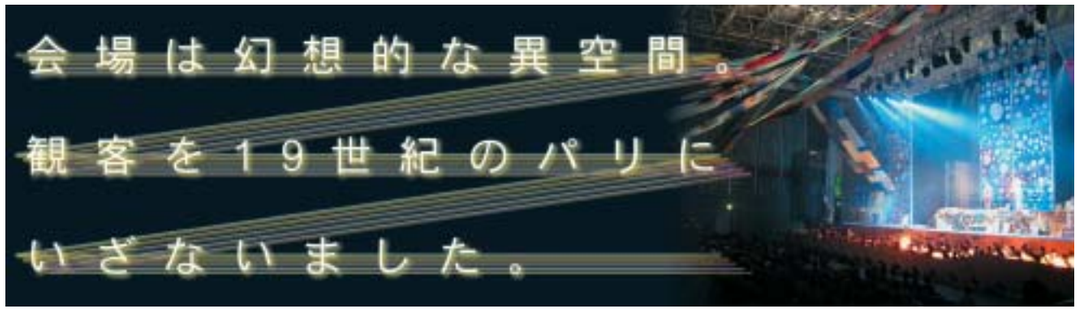

市民オペラ「ラ・ボエーム」は、7月17日と18日の2日間公演。17日は、市内の中学生を保護者同伴で無料招待し、18日に一般の方々を対象に公演しました。

「ラ・ボエーム」は、全4幕で構成され、市民の皆さんは第2幕と第3幕に登場。ヒロインのミミ役を演じた塩田美奈子さんをはじめ、日本を代表するソリストの皆さんたちと共演しました。

▲オペラの中で最も華やかな場面である第2幕では、市民の皆さんが売り子や恋人たち、学生などの役を合唱しながら演技しました。また、演技のみの黙役として、楽隊にふんした市民の皆さんも登場しました。

▶イタリア語で演じられた「ラ・ボエーム」。今回の公演では、舞台の左右に設置した日本語の字幕スーパーを見ながら観劇を楽しむことができました。

▲出演者の衣装は、テープで裏張りした新聞紙を、持ち寄った衣服などに思い思いのイメージで張り合わせて作られました。

▲普段は化粧をしない男性もボランティアのお手伝いでメイクアップ。自然と気分が引き締まります。

◆主なキャスティング

芸術監督　三枝　成彰
演出、装置・衣装デザイン　日比野克彦
指　揮　井上　道義
ソリスト（独奏者）
・ミミ役　塩田美奈子
・ムゼッタ役　中嶋　彰子
・ロドルフォ役　小林　一男
・マルチェッロ役　福島　明也
・ショナール役　秋山　隆典
合唱・黙役　白石キューブ合唱団
白石キューブジュニア合唱団
市民有志の皆さん
管弦楽
仙台フィルハーモニー管弦楽団

◆ラ・ボエームのあらすじ

物語は、芸術家を目指す貧乏な若者4人が共同生活をし、その中の一人の青年ロドルフォが同じアパートに住むお針子ミミと出会うところから始まる。間もなく交際を始めた2人だったが、ミミは以前からの持病が悪化し、病気に気づいたロドルフォは苦悩する。偶然にもロドルフォの苦悩を知ったミミは、自分からロドルフォに別れを告げる。時がたち、ミミとの日々を懐かしむロドルフォのもとに、死を悟ったミミが友人に連れられひん死の状態でやって来る。そんなミミのために、友人たちは力を尽くすが、ほどなくして友人たちに見守られる中、ミミは眠るように息を引き取る。

▶日本を代表するソリストたちと共演。ソリストの衣装も日比野氏らがデザインして、新聞紙と同じ材質の紙を使用しました。

▲第4幕のミミが死を迎える場面では、観客も感情移入。会場は静まりかえりました。

▶第1幕と第2幕の幕間には、市民ふんする売り子の皆さんなどが、「ボナセーラ（イタリア語でこんばんは）！」「メリークリスマス！」とにぎやかに観客席へ。会場は華やいだ雰囲気に。

■大勢の市民が登場した第2幕

市民の登場を期待して、幕が開くと同時に拍手がわき起こりました。クリスマスのにぎやかな雰囲気を市民の皆さんが見事に演じきりました。

▲幕間の慌ただしい舞台裏。時間を計りながら何度も練習しました。

▲11本の紗幕の上げ下げ。早さや強弱も場面ごとに違いました。

▲手作りの小道具も舞台を支えました。

▲「観賞ありがとうございました！」と観客をお見送り。「頑張ったね。良かったよ」と次々とねぎらいの言葉をかけられていました。

◆出演された市民の皆さんから

○とても満足しています。白石の力ってすごいと思いました。白石にとって今日のオペラが新たな文化のスタートになると確信しています。裏方の方、市民の皆さんの力の結集だと思います。

○オペラは動作が入るので、参加するか迷いましたが、今は参加して良かったと思っています。今日で終演。少し寂しい気もします。

○スタッフの皆さんに感謝です。衣装の方などは不眠不休だったのではないでしょうか。

◆オペラを観賞した皆さんから

2日間で約2千人が観賞しました。

●手作り感と市民が作り上げたオペラの感じがとても良かった。

●幕の材質、上げ下げの仕方、何層にもなる奥行き、雪の背景の絵、光のシャワー、照明が段ボールや衣装を一層引き立て、夢の世界のようでした。市民の皆さんも素晴らしい演技でした。

●新聞紙で作ったとは思えない衣装に驚きです。感動しました。

●2幕の前に新聞の服を着た人が会場内を回ったのは面白かった。

●白石でもこのようなイベントができることを誇りに思います。

●息をのむような幕引きの場面がありました。幕が生きた芝居を見たことがありませんでした。

●できたらまたやってほしいです。その時は私も参加したいです。